人の いのち

この頃，新聞の社会面を見ると殺人の記事がよく眼にとまる。それも他人同志というのならばいざ知らず，血縁の者同志が行った事件が多いのには驚かされる。親が子を，子が親を，あるいは兄弟姉妹間，伯(叔)父伯(叔)母間等といったものまである。他人同志であろうが血縁の間であろうが，人命尊重という点では，極めて遺感なことである。

特に私にとって解し得ないのは，親が子供を殺すということである。いかに生活苦からとはいえ，又は障害のある子供とはいえ，苦労して生み育てた自己の分身を安易に —— 本人自身は悩み悩みの果てなのかもしれないが —— 殺すということは理解しがたいことである。共に強く生き，世間にこの様な親子もあるのかと思わせることは出来ないのであろうか。

暴力団同志の殺し合いにしても，彼等は人の命など鴻毛の軽きに感じているのかもしれない。一時代前の特攻隊(真撃に生き，そして死んでいった人々には申し訳ないことであるが)の如き有様で飛び込んで行くのであろう。戦争中であっても，一般の人々はこれ程人の命というものを軽んじたことはなかった。生きることに懸命になって，むしろこの戦争中をいかに生きていこうかと考え，そして逃げ，隠れたのである。

頭上をB29やグラマンが飛び交う中に，戦場の人々は勿論であるが本土の人々も生きてきたのである。私自身も現に朝食事に空襲警報が鳴り，家を飛び出したら眼の前をグラマンが急降下してきて，ダダダダ——と機関砲を撃ってきた。とっさに庭の木の影にひし伏した。あとで見ると，隣の板塀に直径3～4cmの穴があいていた。それもわずか50cm位の距離であった。

又，艦砲射撃が頭上を通過する様や，水戸市がB29のバスケット爆弾の爆撃を受けているのを恐怖感をもって見，さらにB29が高射砲の砲撃を受けて尾翼からものすごい火煙を吹きながら，家の屋根にあたるのではないかと思う程低空で海へ落ちていくのを見たりした。

余りに自分の体験のみを書きすぎたようであるが，他の人々もこれ以上の経験をしたことであろう。こんな中で人々は生きるということに懸命なのであった。それなのに，当時の自分と同年輩の現在の若い人が，親を殺傷するなどということは何たることかと，しばしば思う。

それでも最近は，境遇というものが人を殺させるのかもしれないと考えることがある。つまらぬ理由で人を殺す。「この野郎!!」と思ったりすると外形的でなく心の奥底に殺人の動機が生じるのかもしれない。それがくだらないことから行動となって現われる。勿論それは計画的殺人ではない。しかし余りにも刹那的ではないだろうか。それにしても平和にして無事なこの時代に，その日その日の食べることを考えていた時代より殺人が多いというのは，やはり人の命を尊重しない風潮をあげざるをえないのだろうか。

(小林　真)

不定期版　センチメンタル・ジャーニー・・・その3

取手市（9月1日現在　人口63,905人，18,276世帯）

上野から常磐線に飛び乗り，ウツラウツラと居眠りを極め込むうちに，電車は千葉県を通り過ぎ，利根川を渡る。渡ればその途端に空気が一変して，ヒンヤリとさわやかになり，思わずホッと一息つく。そこはもう茨城県の入口，取手市である。

電車を降り，新町寄りの出口を通る。駅前からすぐに右に折れて坂道を登り，左に曲ればやがて国道6号線に出る。車の排気ガスにさらされながら横切って，そのまま真っ直ぐに行けば，294号線の旧道である。少し行くとすぐ左手に学校がある。これこそ我が母校の白山小学校である。

ここに転校してきたのは，昭和34年，桜もほとんど散ってしまった頃である。当時の取手は，まだ市制ではなく町制であった。従って母校のフル・ネームも北相馬郡取手町立白山小学校ということになる。一部の校舎は鉄筋2階建てで，なかなか立派な学校であった。

私は5年3組に編入された。この時に担任の先生はなかなかユニークだった。授業中にうっかりよそ見をしたり，ボンヤリしていようものなら，いきなり自分の無精ヒゲだらけの頬をこちらの頬にこすりつけるのである。これを通称「ヤスリかけ」といって，その痛さときたらまさにヤスリをかけられた様で，こすられた個所は皮こそ破れないが真っ赤になってしまう。これは男女を問わず，無差別かつ不意打ちに行われ，選ばれた哀れな犠牲者の悲鳴で他の者は瞑想から我にかえるのであった。

天気のよい土曜日には，野外授業と称してクラス全員を引きつれて近くの山や，利根川の川辺に遊びに行くのである。山を歩けば畑を踏み荒してお百姓さんに怒鳴りつけられ，川辺を歩けば川に落っこちるという我々を引率するのだから，先生もさぞかし大変であったことだろう，とこれは今にして思うのである。

5年生の秋の学芸会も楽しかった。出し物はクラス討議で決められたが，担任の先生の影響か，我がクラスの出し物はユニークであった。題目は一応「器楽合奏」ということになって，曲名(忘れてしまったが)まで決まっていた。

さて，学芸会の当日，出し物も進み，いよいよ我々の番とはなった。幕が上った時，観客は思わずどよめいたのである。それもそのはず，演奏者の手にあるのはいわゆる楽器ではなかった。石油カンを棒ではたく者，木と木を打ち合せる者，水の入ったビンを振りまわす者，要するに音の出るものなら何でもよいわけである。演奏に入ると，それを力まかせに鳴らすのだから，講堂の中は大騒ぎで，決局何が何やらわからないうちに幕が降り，観客の大笑いと拍手がなかなかとまらなかった。

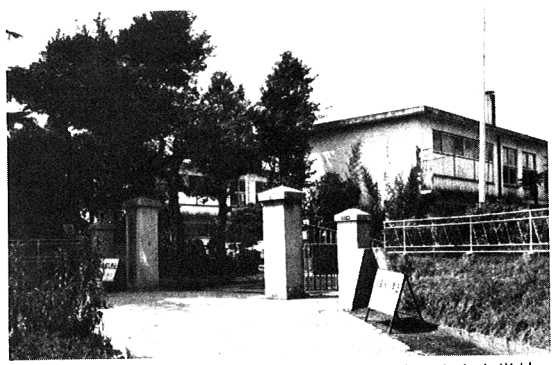
今日の筆者に多大の影響を与えたこの先生も，数年前に亡くなられたと聞く。

当時住んでいたのは，白山前6丁目(今の白山8丁目)といい，ちょうどキャノン取手工場の正門前であった。今でこそ立派な294号線も，当時は降ればドロ沼，晴れれば砂漠という悪路であった。この道を少し行けばY字路で，左は戸頭から守谷町へ，右は寺原から伊奈村へ通ずる。右へ折れて坂を下り，見上げれば小高い丘の上に第2中学校がある。

中学1年の夏休み，ファーブル昆虫記を全巻読破せんものと秘かに志を立て，炎天下に学校の図書室に通ったこと，学校のすぐ隣の，ブルドーザーで整地しただけの町営グラウンド(今の市役所)で土器の破へんを採集したことなど，思い出はつきない。

ようやく中学2年生になろうとした矢先，またまた転校することになってしまった。

ここ4・5年のうちに，何度か取手市を訪れたが，自分の住んでいた家，通った学校がどんどん古びていき，町並が以前にも増してにぎやかになっていくのを見る度に，何やらセンチメンタルな気分になっていく。　（伊藤）



懐しの母校　白山小学校